

神野慧一郎著『ヒューム研究』（本文 三九二頁。序、目次等一〇頁。人名・事項索引、引用文献二二頁。ミネルヴァ書房、昭和五十九年刊。）

田村 均

英国古典経験論に関する日本語の本格的な研究書を手にする
ことは、不思議にも稀である。道徳論と知識論との両面にわた
ってこの経験論哲学が占める位置の重要性は誰もが知るところ
である。にもかかわらず、その精密な研究が世に現れることは
少ない。だが、いまここに、神野慧一郎氏による『ヒューム研
究』の一冊が現れて、すぐれた研究に接する喜びをわれわれに
与えてくれるのである。

デヴィッド・ヒュームの哲学者としての活動は、認識論、知識
論をはじめ道徳論、宗教論から歴史研究にまで及んでいる。神
野氏は、この広い範囲の中から、人間の知性についてヒューム
が基本的見解を記した『人間本性論』(A Treatise of Human
Nature)』第一巻を取り上げ、綿密な解釈を行なっている。ヒ
ュームの同時代から現代に到るまでのヒューム解釈の動向を踏

まえ、委曲をつくして若きヒュームの思考過程を読み解こうと
する著者の姿勢は、われわれの模範とすべきものである。のち
に記すように、書評子は神野氏の見解のすべてに同意できるわ
けではなく、あるところでは少しく意見を異にすると言うべき
なのだが、つねに問題点を大局から明示しつつ細部をゆるがせ
にせずに論を進める氏の態度には賞讃を惜しまない。

二

本書『ヒューム研究』は、三部構成の全十六章から成る。第
I部は「ヒューム哲学の背景と意図」と題され、四つの章を収
める。著者が自らのヒューム解釈の基本的方向を述べる部分で
あり、全体の序にあたる。第II部は「ヒュームの哲学的論理」
と題され、九つの章を収める。内容的、量的に本書の中心を成
す部分であり、知覚論、因果論等ヒュームの知識論の中心問題
が扱われている。第III部は「哲学的議論」と題され、物体、自
我、ヒュームと懐疑論、の三つの章を収める。これらは全体の
総括的解釈という位置を占めるものである。

著者のヒューム解釈は、「彼〔ヒューム〕の経験論を懐疑論
ではなく科学的方法に傾倒した自然主義に立脚するものとして
捉え」という方向にある(序一頁)。「人間本性論」を初めて
読めば、ヒュームは客観的認識の成立可能性を疑っているの
ではないかとの印象は、誰にとっても避け難いだろう。ヒューム
を懐疑家とみなすことに反対して、彼の積極的な主張は自然主
義の立場にあると唱えたのは、著者も随所で紹介するように、

ノーマン・ケンブ・スミスであった。従って、著者の解釈の方向はケンブ・スミスの流れに沿うわけであるが、実はこれともまた少し異なる面を持つ。著者によれば、ケンブ・スミスは、ヒュームの信念説を検討して、ある意味でヒュームを非合理主義者のごとく理解したかたちになっている。これに対し著者は、ヒュームの信念説における「道理への志向（一七頁）」をより重視しようとする。従って、著者の提起するヒューム像は、通念に反してある程度合理的な含みを持つものということになる。

こうした関心から、著者は、ともすれば見すごされてきたヒューム哲学の背景として、デカルト哲学をあげる。もちろん、「ヒュームの哲学はデカルトの合理論と根本的に異なる（二七頁）」のだから、著者は、「デカルトとヒュームとの間には類比と対極とがある（二三頁）」という観点をとって、多角的に両者の関係を捉えようとする。その結果浮び上がって来るのは、「デカルト的哲学ないし形而上学がヒュームの哲学的な議論展開のガイドラインとして働いている（二五頁）」という事情である。ヒュームは、自我についての説をはじめデカルト説のいくつかをまさに攻撃した。だがその一方で、彼は、デカルトに由来する観念説をはっきり継承しており、また、知覚の因果説を当時の科学的常識として前提しており、なによりも二元論の枠組みをゆるやかな形で受け容れている、と著者は指摘する（二二～二六頁）。

著者の考え方のめざましい特徴は、ヒューム哲学をはっきり

二元論として理解するという点にある。これは、ヒュームを現象論者と見る解釈をしりぞけることにつながっている。論理実証主義者たちによるこのような解釈は、ヒューム哲学のある側面についての意義付与ではあっても、決して正しい解釈ではないとみなされるのである（七頁、二八七～二八九頁）。こうして、多分に現象論的傾向をもつヒュームの諸々の議論を、二元論を背景にしたものとして読み解いてゆくということが、著者の設定した解釈の方向なのである。

では、次に、ヒュームの知覚論と因果論に対する著者の解釈を紹介することしよう。

三

知覚論を検討する際に最も問題とされるのは、印象と観念というヒュームの知覚区分がはたしてうまく成立するのかどうか、成立するとすればどのような前提においてなのか、ということである。周知のように、ヒュームは、印象は勢いと活力に富み、観念は淡く弱い、という区分の規準を立てた。だが、知覚自体の強弱にのみとづくこのような分類は、うまく機能するかどうか甚だ疑わしい。従って、「ヒュームの提出した印象と観念との区別規準は、知覚を単に知覚表象として見るのではなく、知覚の内容について彼が前提している存在論的主張を読み込まねば殆ど無力、無意味である（六〇頁）」と著者は考える。具体的には、印象の持つ活力や勢いといった主観的性質は、客観的世界との関連のなかで措定されているのであり、つまり、印象に

は實在感が伴うということをヒュームは言いたいのだ、と考えるのである（六一―六五頁）。これは、知覚の因果説をヒュームが取り入れていると解釈することに同じであり、注目に値する。

まず著者は、観念以外に知覚の対象はないとする十七・十八世紀の観念説が、知覚の因果説や二元論などと決して矛盾せぬことに注意をうながす。デカルトもロックも観念説を奉じつつ、二元論と知覚の因果説を採ったのである。

では、ヒュームはどうか。何よりもまず、物体の存在の疑うべからざることを彼は全くはつきり認めている。彼は一種の實在論者なのであり、二元論の枠組みを踏襲している。とはいえ、知覚論で問題になるのは、知覚と實在との関係のあり方なのだから、二元論の枠組みがあるというだけでは、ヒュームの知覚論を齊合的に理解するには足りない。というのも、ヒュームの公式見解からすれば、「たとえ、印象は實在と関係がある知覚だと言ったところで、その意味は、印象はどれをとって調べて見てもそれに対応する實在の側の事態が存在しているということ（六四頁）」にすぎないだろうから。

二元論を前提としつつ、知覚自体の強さだけから實在性を結論するならば、幻覚や錯覚についてヒューム説は困難に陥るはずである。ところが、自説の不備を指摘しながらも、ヒュームは自説が一般に成立することを疑っていない。とすれば、ヒュームの説くところを齊合的に理解するためには、「實在する事態は知覚されれば印象を産出している（六五頁）」という知覚の

因果説に基づく考え方を、ヒュームが暗黙のうちに前提しているのだと解するほかはない。こう著者は考えるのである。

もちろん、ヒューム自身の論述の中に、右のごとき前提の存在の示唆がある。著者は、まず、印象と観念の強弱規準による区別が不成功になる場合としてヒュームのあげる例が、すべて異常な状態における知覚の例ばかりだ、ということをおげる。強い知覚がありながらこれに因果的裏づけがない場合は異常なのだ

とヒュームは考えている。これは、正常な場合には、強い知覚（印象）には因果的裏づけが伴うという考えをうかがわせるだろう。また、ヒュームが、知覚の因果説を前提とするような事実を引用しているということも重要である。ヒュームは、科学的事実としての知覚の因果説を、確信していたであろう。

さらに、もしもヒュームが強弱規準のみによる知覚の区分に頼っていたならば、彼自身の信念説が成り立たなくなっていたはずである。彼は活力を賦与された観念として信念を定義するがこのやり方でもって印象とは別の類として信念が定義できるのならば、強弱規準以外の分類規準がなくてはならぬ。

かくして、ヒュームは二元論を前提とした知覚の因果説を暗黙のうちに取り入れて、自らの知覚論を展開した、と解釈されるのである。この解釈は、パークレーの後を継いで現象論的な観念説をヒュームが主張しているとするような通念には、真向うから対立するものである。

ヒュームは物体の存在を疑うべからざるものとして認めていた。とはいえ、ヒュームは観念説を採ったのだから、この点で

は現象論とある類縁性を持つ。だが、ヒュームが現象論に与しないことは、「感覚所与の集合は物理的対象(物体)を形成しないこと(二八八頁)」を彼が認めている点に明らかであると著者は考える。ヒュームの考えでは、物体についてのわれわれの信念は知覚の集合へと還元できず、物体の連続存在や独立存在は知覚に見出される性質ではないのだから、物体は知覚の集合を越えていることになる。

では、ヒュームは懐疑論を論破して外界の存在証明を行なっているかといえば、これまたそういう事実はない。つまり、「彼の二元論は合理論者の考えるような基礎づけを持たない(二八七頁)」のである。この問題についてのヒュームの位置は独特のものである。

先行する学説のいろいろな要素を取り入れながら、ヒュームは、「哲学的問題としての知覚と外界との関係については他の人々と異なる議論を立てたと言ふべき(二九二頁)」であると著者は主張する。ヒュームが問題としたのは、「物体の連続的または独立的存在の観念がいかにしてわれわれの有するところとなるかの説明であつて、それら観念の正当化、すなわち哲学的基礎づけではない(二九六頁)」。著者によれば、ヒュームは、基本的原理から出発して、知識といわれるものすべてを正当化することを目指しているのではなくて、われわれが現に持っている信念の体系の生成の過程を、自然科学の知識も援用しながら記述することを試みているのである。それは、クワインの自然主義的認識論(naturalised epistemology)の立場に近い

のではないか、という示唆が与えられている。

知覚の整合性と恒常性ことから、想像力の自然な作用に従つて、物体の独立的連続的存在の信念が成立する、というヒュームの考え方を、著者は、「信念の成立の仕方について事実問題を提出した(三〇五頁)」ものとみる。感覚の対象の連続存在の信念は、観念説の立場からすれば虚構であり誤謬であるとヒュームは言うが、それは、物体の存在が論証的知識ではないことを示したいがためであつて、懐疑論を主張したためではない。懐疑論からわれわれを救出するのは、観念説の立場からすればむしろ間違ひであるような、『粗漏と不注意』に基づく(三〇三頁)想像の力なのであるということ、ヒュームは積極的に言っているのである。彼の立場は「論証における懐疑論を自然への信頼によつて克服するという立場(三一五頁)」にはかならない。

右の知覚論の解釈におけると同様に、因果論の解釈においても、認識にかかわる事実問題をヒュームは提起しているのであつて、認識論上の概念の正当化を目論んでいるのではない、ということが著者の重要な着眼点になつてゐる。

著者自身の言葉で因果論の解釈のありようをたざれば、まず、「ヒュームは因果関係の成立を疑つてなどいない(一六四頁)」のであり、「実在における因果関係の成立を正当なるものとして論理的に示しようという議論を却下しているだけ(一六八頁)」である。ヒュームの課題は、「因果関係の成立の条件の解明にある(一六四頁)」。「ヒュームには因果性の原理の正当性を示すことなどは念頭になく、彼の目指したことは、われわれが因果

性の原理に従って推論する実態の機構解明にあった(二一九頁)のであり、「原理がわれわれの心理的生理的構造の故に、われわれの受容しなくてはならないものであること(二三三頁)」を示そうとしているのである。

周知のように、因果性概念についてのヒュームの説明は、対象間の恒常的連接の経験と、これに基づく想像力の連想機構の作用という二段階の説明の形で与えられている。このヒュームの説明も、著者によれば、因果的必然性を論証的に導出できるという主張を却下して、経験的にこの必然性の觀念の成立經過をたどったものであって、心理的、発生論的に因果性概念の正当化を図っているものではない。ヒュームは、経験的なものとしての因果的必然性のあり方を、あくまでも彼の觀念説の枠組みの内部において説明しようと試みたわけである。

しかし、この試みの結果、「ヒュームにとって因果連関は実在の機構ないし構造を意味するものではない(二六九頁)」ということになる。だが、著者は、直接的所与を越える事実推論に関してヒュームが懐疑論を立てたとは考えない。因果連関の實在的本質を見出すことは實際上不可能だ、とヒュームが言うとしても、それは、「ヒュームの議論にとってはどうでもよいこと(一七〇頁)」である。「因果の連関を発見することは、ヒュームにとっては、事物の實在の本質への洞察を意味しない(同上)」という、このことだけが大事なのである。「ヒュームによれば、因果的命題を真ならしめるものは自然におけるしかるべき規則性のみ、と言うことになる(二三三頁)」わけである。

ただし、事実推論に関してヒュームは懐疑的ではない、と言うためには、もうひとつ、帰納法に対するヒュームの懐疑として知られる問題について、明確な解釈を示さねばならない。この点に関して、著者は、帰納法に対する懐疑などヒュームには存在しないし、そもそも、非演繹的な推論の正当化という問題が、ヒュームの課題であったのかどうか疑わしいと主張する。「事実に関する推論の帰結を信ずる理性的根拠があるかという問題はヒュームにとって問にならないと言うべき(二五九頁)」である。なぜなら、「そうした根拠を与えるのは理性ではないというのが彼の議論(同上)」なのだから。「事実に関する推論を引き出す源は習慣しかない(二六〇頁)」、これがヒュームの答えだろう。ヒュームの立場は、事実推論の演繹的正当化は不可能だというものではある。だが、彼は、演繹的性格の絶対的知識のほかに、立証的と蓋然的という二種類の知識区分を立て、非演繹的な知識において確からしさの程度に相違のあることを積極的に述べる。これは、帰納法に対する懐疑とは両立すべくもないことである。

また、「もちろん、ヒュームは、『ある妥当でない推論は、ある意味で、理性に基づいている』という積極的主張を明言はしていない(二六九頁)」のだが、「自然に訴えること(二七〇頁)」を通じて、合理論者流の基礎づけとは別のやり方でもって、われわれの持つ信念が理にかなったものでありうることを示したといつてよい。懐疑家でないヒュームは、また決して非合理的な信念の説を唱えたのでもない。むしろ、理にかなった信念と

いうものの存立を積極的に認める立場にヒュームはいる、これが著者の考えである。

以上のように、著者のヒューム解釈は、懐疑家という通念をしりぞけ、新たな知識概念を新たな問題意識で定立しようとした自然主義者というヒューム像を、一貫して強く主張するものである。

四

以下には、著者のヒューム理解に対する書評子の感想を記して、拙文の締め括りとしたい。

ヒュームは、知覚の因果説を科学的常識として受け容れつつ、自らの知覚論を展開している、という著者の指摘は卓見であると思う。また、知覚の因果説を受容する前提として、常識的世界像としての二元論の立場が採られている、との指摘も正しいものと思う。知覚自体の強弱という規準では、『人間本性論』の冒頭を読む者すべてにおそらくは避け難いものである。だが、いわゆる観念説とは現象論的傾向の強い説であるから、知覚の因果説や二元論が、ヒュームの思惟の中に暗黙のうちに織り込まれているという着想は盲点になりやすい。著者の指摘は、この点に関するわれわれの漠然たる困惑を霧消せしめる力を備えている。

だが、一つの困難の解消が別の困難を招来するという事情もあるように思う。素朴に言えば、その困難とは、ではなぜヒュー

ムは知覚の因果説と二元論という前提を明言しなかったのだろうか、という問いである。彼には、直接的所与を越えて実在を論ずるのを出来るだけ避けようとする意図が、やはりあったのではあるまいか。ヒュームの公式見解は、とにかく、知覚から実在へ、という方向なのであるから、このように推測することは不自然ではない。そこで、こうしたヒュームの意図をどう取り扱うかに関しては、著者の解釈に対し、書評子には若干の疑問が残るのである。

ヒュームのひとつの立脚点である観念説の立場からすると、連続性や独立性という物体の存在様態は、「粗漏と不注意」によって誤って知覚対象に帰されるものにしすぎない。逆に、これまたヒュームの主張である人間の自然本性の力を信頼する立場からすれば、観念説に基づく実在の哲学的分析の方に、所詮は無理な滑稽さが伴うことになる。言いかえれば、常識的世界像として二元論を採るということ、哲学的分析において観念説を採ることが、ヒュームにおいて統一性あるひとつの主張を形づくるまでにはなっていないと書評子には思われるのである。つまり、結局のところ、ヒュームは実在論と現象論との間で引き裂かれているように見える。ヒュームの自然主義は、あやうい平衡の上にあると言うべきではなからうか。

さて、因果論の解釈においては、因果論を展開する際の、ヒュームの問題意識の取り出し方が、卓抜であると思う。ヒュームはわれわれの所有している因果性概念の認識論的正当化を図ったわけではなく、その成立の経過の解明を試みたのであって、

一般に事実推論の認識論的基礎づけということではヒュームの課題ではなかった、という著者の指摘は、ヒュームの因果論の議論展開の総体をよくおさえている。恒常的接続を経験すれば自然に因果的接続を想定するようになる、とヒュームは言っているものであって、この自然な経過そのものを正当化する意図は、彼にはなかっただろう。

また、右の指摘に基づいて、ヒュームには帰納法に対する懐疑などないということを示している議論も、貴重なものであると思う。ヒュームは因果連関の存在を疑わなかったから、恒常的接続と信念とで説明されるヒュームの因果性概念と實在の因果連関とが、どういう関係に立つのか、という問いが普通は生ずるように見える。そして、ヒュームは因果の實在の本質の洞察を不可能とするのだから、この問いに彼はまったく否定的に答えたとする解釈が、すなわち、ヒュームは帰納的推論に対する懐疑を提出したとする解釈が成立することになる。これに対する著者の回答は、右のごとき問いをヒュームは問題外としているのだ、というものである。もともとヒュームには右のごとき問いを立てる意図が無い。この指摘は、ヒュームの問題意識をよく捉えていると思う。

だが、この点についての著者の指摘を正しいものとして承認しても、書評子には、まだひとつの疑問が残る。

ヒュームの課題は、なるほど因果推論をはじめとする事実推論の正当化ではなかっただろう。だが、彼の課題のひとつは、因果推論を理性に基づくものとして正当化する立場を誤りとす

ることではあった。そして、彼は、事実推論のこうした合理論的基礎づけを問題外と見て、習慣という概念でもって事実推論を説明しようとした。さて、この場合、このような方向をとったということ自体は、ヒューム本人がどのような問題意識を持っていたかという事情とは独立に、認識論上のひとつの態度を形づくるということとは間違いないのではないか。そして、あえて言えば、この態度決定の延長線上には、この世界の客観的實在の實在的本質を洞察することがわれわれに可能か否かという問題を、ひとつの擬似問題として無化してしまおう、という帰結がありはしないか。言いかえれば、現象論的な知識観が望みされるのではないか。

ヒュームは、因果連関の實在は疑わなかったが、實在の因果連関とわれわれに認識される因果連関との間の、合理論者が懸けた橋は落してしまっている。そして、新たな橋渡しは行なわなかった。とすれば、ヒュームにおいては、實在とその認識との間の関係づけの理論が空席になっているのか、あるいは、彼は、本来そのようなものは不必要だと考えたのかのいずれかであろう。後者の立場を徹底すれば、知識についてのある種の現象論が出現して、彼の常識的實在論に抵触するだろう。前者が真相であるとするれば、ヒュームの哲学には埋められるべき欠落があることになるだろう。いずれにせよ、ヒュームの自然主義が得ている安定は、必ずしも確固たるものではないように思われるのである。

以上のごとく、あえて述べるならば著者の解釈に対して異を

立てたいところが無いわけではない。だが、終始一貫して自然主義者としてのヒューム像を描き出そうという著者の努力が成功していることは、疑いもないものである。

多様な論点を含む大部の著作の全容を、限られた紙幅で紹介することは不可能に近い。以上に取り上げたほかに、自我や信念についての議論をはじめとして重要な論点を含む章は多く、知覚論、因果論についても、以上に紹介したのは著者の議論のほんの一端であることは言うまでもない。触れることのできなかった論点については、本書をどうか直接お読みになるようにと、諸氏にお勧めするほかはない。ヒューム哲学に関心を持つすべての人々にとって、本書は間違いなく有益である。ヒューム研究における基本的文献として永く記憶せらるべき価値が、本書には明らかにそなわっている。

(J)

(筆者) たむら・ひとし 京都大学文学部「哲学」研修員

前号(五五〇号)	正誤表	頁	行
一〇	Znspiel	九	誤
一五	Entwurf	二	
二八	肯定	一、一九	
一〇四	すなわち	十	
〃	もっと	一五	
一三三	擬人化する場合	三	
三八五	Book I	一八	
四〇六	すなわち	一九	
四一四	分析上	一四	
五九七	どうでもいいこと	上段三	
六〇一	何一つとり立て	下段一〇	
六〇六	「第二の人生」	上段八	
六一一	打たれざるをなかつた	下段二二	
六一二	き聴つつ	上段一四	
〃	病没したした	上段二三	
六一四	不断変じて	下段一四	
六一五	論じて及ばざる	下段八	
	論じて及ばざる		正